

萬葉集

——一首中に表れる異なる訓みをしている同じ漢字の研究(七)——

北村 英子

本稿は「萬葉集——一首中に表れる異なる訓みをしている同じ漢字の研究(六)——」（大阪樟蔭女子大学論集「第38号」）に引き続き、今回は巻十の二二一〇番歌から、一首中に表れる同じ漢字が異なる訓みをしているものを抽出し考察していく。

☆明日香河 黄葉流 葛木 山之木葉者 今之落疑（十・2210）

115、黄葉流 山之木葉者

第二句の「黄葉」は「黄」を「モミチ」と訓み、「葉」を「バ」と訓むと考えるなら、第二句の「葉」と第四句の「葉」を敢えて揃えようと、意図的に表記したのではないか。この歌の一首前の（十・2209）番歌に「黄葉」を「モミチ」と訓み、また、この歌の一首後の（十・2211）番歌にも「黄葉」を「モミチ」と訓んでいるが、これらは葉が「黄色く色づくこと」を意味し七音で訓むためであろう。しかし、今の場合の「黄葉」

を「モミチバ」と訓むのは、「色づいた葉」のことを意味する。したがって、「モミチバ」は、集中すべて「黄葉」と表記されている。これは恐らく、当時、大和地方では、赤葉より、黄葉を觀賞する場合が多かったためであろうと思われる。

さて、第二句と第四句に「葉」という漢字を用いているが、集中「ハ」は「葉」以外の漢字は見当たらない。漢字本義によるものを両者用いている。

☆一年 二遍不_レ行 秋山乎 情尔不_レ飽 過之鶴鴨（十・2218）

116、二遍不_レ行 情尔不_レ飽

第二句目と第四句目の上から三つ目の位置するところに同じ漢字「不」がみられ、一方は連体形「ヌ」と訓み、一方は連用形「ズ」と訓んでいる。集中、打消の助動詞「ヌ」の漢字表記は「不」に次いで「奴」が極

めて多く、この外、「努」や「沼」「農」等がみられる。一方打消の助動詞「ズ」の漢字表記は「不」に次いで「受」が極めて多く、この外、「須」「授」等がみられ、両者それぞれ「不」以外の代わるべき文字があるにもかかわらず、通常の漢字本義に添う「不」を用いて、文字の統一性を図っている。

☆秋芽子之 上ル置有 白露之 消鴨死爰 戀乍不^{アラ}有者（十・2254）

117、上ル置有 戀乍不^{アラ}有者

第二句目と第五句目の上から四文字目の位置するところに「有」という同じ漢字が用いられ、一方は「タル」と訓み、一方は「アラ」と訓んでいる。

集中、「タル」の漢字表記は「有」を用いる場合が極めて多く、次いで、「在」・「而有」・「而在」がある。一方、「アラ」においても「有」の漢字表記が最も多く、次いで「在」・「荒」等がみられるが、常訓の漢字「有」で統一性を図ったといえよう。

☆吾屋前 秋芽子上 置露 市白霜 吾戀目八面（十・2255）

118、吾屋前 吾戀目八面

第一句目と第五句目の語頭に「吾」という同じ漢字を用い、一方は「ワガ」と訓み、一方は「アレ」と訓んでいる。第一句目の「吾」を

「アガ」と訓むのではなく、「ワガ」と訓むのは、下接の語が「屋前」という語であるからである。集中、「ワガ」は「吾」の漢字を用いる場合が最も多く、次いで、「我」の漢字を用いるのが極めて多く、この外、「余」・「妾」等の漢字を用いている。一方、「吾」を「アレ」と訓むのは、「Ware」の語頭音「W」が脱落して「アレ」となったと考える。旧訓では「ワレ」と訓ませているものが多いが、新訓で「アレ」と改訓されている。それは『時代別国語大辞典上代編』によると、「アレはワレにくらべて、単数的・孤立的な意のものとする説もある。」この御説により「アレ」と改訓されたものと思われる。

さて、両者、「我」等、代わるべき文字があるにもかかわらず、「吾」の漢字を両者共用い統一性を図ったと考えられる。

☆言出而 二者忌染 朝貞乃 穗庭開不^デ出 戀為鴨（十・2275）

119、言出而 穗庭開不^デ出

第一句目と第四句目に、「出」という同じ漢字が表れる。一方は「出」を「イデ」と訓み、一方は「デ」と訓んでいる。第一句目の「出」を「イデ」と訓むのは、漢字本義に添う訓みをし、集中、「イデ」は特別の表記以外はすべて「出」の漢字を用いている。一方、「出」を「デ」と訓むのは、「イデ」と訓むべきところであるが、七音句の位置するところであるため、「イデ」の「イ」音を省略して、「デ」のみの訓みをしたと考える。集中、「デ」は「出」の外、「氏」・「呂」・「低」・「泥」等みら

れるが、第一句目の「出」を意識して、第四句目の「デ」も「出」の漢字を用い、統一性を図ったものと考ええる。

☆秋芽子乎 落過沼蛇 手折持 雖見不^{サフシ}怜 君西不^ネ有者（十・2290）

120、雖^{サフシ}見不^{サフシ}怜 君西不^ネ有者

第四句目と第五句目に、「不」という同じ漢字がみられる。第四句目は「不^{サフシ}怜」を「サフシ」と訓み、「サビシ」の古形で今いう「淋しい」意である。集中、「サフシ」は「不^{サフシ}怜」の表記の外、「不^{サフシ}樂」の表記がみられるが、ここで敢えて「不^{サフシ}怜」の漢字を用いたのは、第五句目の「不」を意識して、統一しようと考えての記載であろうか。一方、第五句目の「不」は「ネ」と訓み、この表記は集中極めて多く表れる。この外、「ネ」は「禰」の表記も沢山表れるが、記載者は、漢字本義の添う訓みが出来る「不」の漢字を用い、第四句目の「不^{サフシ}怜」の「不」と統一しようと考えたものであろうか。

☆九月之^{ナガツキ} 在明能^{ツクヨ}月夜 有乍毛 君之来座者 吾将^{ナガツキ}戀八方（十・2300）
121、九月之^{ナガツキ} 在明能^{ツクヨ}月夜

第一句目と第二句目に、同じ漢字「月」が用いられているが、両方共、二字熟語の一字である。集中、「ナガツキ」は「九月」の表記しかなく、仮名書き例も見当たらない。したがって、第一句目は「九月」の文字を用いるより外に代わるべき文字はない。一方、第二句目の「ツクヨ」は、

集中、「月夜」という文字と仮名書き例が少し見当たるのみである。したがって、この第二句目の「ツクヨ」は「月夜」と表記する外はない。第一句も第二句も自然に記載されたものと思う。

☆来可^ナ視 人毛不^{アラ}有^ナ尔 吾家有^ナ 梅之早花 落十方吉（十・2328）

122、人毛不^{アラ}有^ナ尔 吾家有^ナ

第二句目と第三句目に、同じ漢字「有」が用いられている。第二句目の「有」は「アラ」と常訓で附訓されているが、集中には最も多く例をみる。この外、「在」「荒」等の表記があるが、「アラ」の漢字本義に添う「有」を用いて記載している。一方、「ナル」を「有」と表記しているが、集中この例は極めて多くみられる。また、「在^ナ」の表記も数多くあり、次いで、「成^ナ」「業^ナ」「生^ナ」の表記がみられるが、今の場合、第二句目と統一性を考えて「有」の表記を用いたものと思う。

以上、巻十においては二十四例について検討した。

次に巻十一の四百九十首の中から、一首中に同じ漢字を用い、異なる訓みをしているものを抄出して検討していく。この巻は作者不明で、古今相聞往來の歌が集まっている巻である。

☆人所^ス寐^ル 味宿不^ネ寐^ネ 早敷八四 公目尚 欲嘆（十一・2369）

123、人所^ス寐^ル 味宿不^ネ寐^ネ

第一句目と第二句目に、「寐」という同じ漢字が用いられている。第一句目は「所_レ寐」を「ヌル」と訓み、第二句目は「寐」を「ネ」と訓んでいる。集中、「ヌル」は「宿」・「寐」・「寝」・「眠」・「睡」の一字が用いられているが、ここでは「所_レ寐」の二字漢字を「ヌル」と訓ませている。集中、この表記はこの一例のみの珍しい孤例である。本来の表記からいえば、「寐」の一字でよく「所」は不要文字である。しかし、『萬葉集注釋―澤瀉久孝著』では、

古義には「所は衍文」としたが、(略)「人所見 表結」(十二・二八五一)など「何々する所の」の意で、動詞の連體形を示すものとして稀に用ゐられたものと見るべきである。(二三四頁)

とあるが、もし「所」の不要文字を入れなければ第一句目は、「人寐」と二漢字の表記になり、落着きが悪いため敢えて、「所」の文字を語句中に補い三文字にしたのではないかと思われる。

第二句目の「寐」は「ネ」と訓ませているが、これは「寐」の名詞形である。集中には「ネ」は「宿」の漢字表記が最も多く、次いで「寐」・「寝」そして「睡」等がある。このように「ネ」の漢字は「寐」以外に、数種の表記があるが、この場合意識的に第一句目と第二句目に同じ漢字「寐」を用い統一性をもたせている。

☆何時^{イツヘン} 不_レ戀時^{トキ} 雖_レ不有 夕方任 戀無之(十一・2373)

124、何時^{イツ} 不_レ戀時^{トキ}

第一句目と第二句目に、「時」という同じ漢字が用いられている。第一句目の「何時」を「イツ」と訓むことは慣例に従い固定化した訓みで、集中最も多くの例をみる。この外、「イツ」は「何」一漢字の例(七・134)(十一・247)がみられるが、通常は「何時」の文字を用いる。一方、「時」を「トキ」と訓むことは通例の訓みとして現在固定しているが、古くは「ト」と「キ」の二語であったようだ。「ト」は時間を意味し、「キ」は期や季を意味していた。この二語が一語を造ったと考えられる。さて、集中を総覧すると、「時」を「トキ」と訓ませている例は最も多い、この外、「辰_{トキ}尔波成」(十一・264)や「諸刃利」(十一・249)などの例が少しのみみられる。したがって、第一句目の「何時」も第二句目の「時」も、通常の文字を用いて極自然に記載したものと思われる。

☆打日刺 宮道人 雖滿行 吾念公 正一人(十一・2382)

125、宮道人 正一人

第二句目と第五句目に、同じ漢字「人」が用いられている。集中、「ヒト」は「人」の漢字表記が最も多く、この外、「見者」(七・120)のように「者」の表記もみられるが、極稀な例で、通常は「人」を用いる。一方、「ヒトリ」は、集中、「一人」と表記するのは通常ではなく稀な例で、この外、「夜一人宿」(十一・247)・「二人服寐」(十二・283)のみみられ、最も多いのは「獨」の表記で、次いで、「一」が多くみられる。したがって、この場合も通常文字である「獨」か「一」の文字を用い

るのが自然であるが、第二句目に「人」の文字があるため、「一」に「人」を加え「一人」と表記し、「正一」のところを「正一人」と三文字にし、結句に安定感をもたせたのではないかと思える。

☆鹿玉 五年雖^レ経 吾戀^{コフル} 跡無戀^{コヒ} 不止恠^{コヒ} (十一・2385)

126、吾戀^{コフル} 跡無戀^{コヒ}

第三句目と第四句目に、同じ漢字「戀」が用いられている。一方は、「戀」を「コフル」と動詞形で用いられ、一方は、「コヒ」と名詞形で用いられている。集中、「コフル」の表記は、「戀」の漢字を用いる場合が一番多く、次いで、「戀流」が多く、後は仮名書例が少し見当たる。この第三句の「コフル」も通常文字「戀」を用いて表記している。第四句目の「コヒ」も第三句目の「戀^{コフル}」と同じ文字を用い「戀」で表記し、統一性を意識している。

『字訓—白川静著』（平凡社）によると、

〔万葉〕には恋を「孤悲」「故非」のように表記する例が多く、そこに一種の表記意識を感じさせるものがある。「孤悲」は「孤^{ひと}り悲^{ひと}しむ」「故非」は「故^{もと}は非^{しか}らず」の意を寄せたものであろう。これらの表記は〔卷十四〕以後のある部分に集中しており、「故非」の例

歌は、人麻呂の〔当所誦詠古歌〕中の一首である。

とあるが、『萬葉集大成』（總索引単語篇）によって調べてみると、名詞「コヒ」を「孤悲」と表記している場合は、(三・325)・(十五・362)・(十

七・391)・(十七・390)・(十七・401)・(十八・403)・(十八・403)の七例で、「故非」と表記している場合は、(十五・3605)・(十五・3737)の二例のみである。動詞「コヒ」を「孤悲」と表記している場合は、(一・67)・(二・102)・(四・560)・(九・1778)・(十四・3505)・(十五・3608)・(十五・3690)・(十七・3891)・(十七・3935)・(十七・3936)・(十七・3977)・(十七・4008)・(十七・4011)・(十七・4011)・(十七・4015)の十五例をみる。「故非」と表記している場合は、(十五・3603)・(十五・3633)・(十五・3631)・(十五・3660)・(十五・3674)・(十五・3721)・(十五・3749)・(十七・3938)・(十八・4121)・(二十・441)・(二十・4476)の十一例を数えることが出来る。このようにみると、「孤悲」も「故非」も、名詞・動詞共「戀」の数と比べるとそんなに多いとはいえない。やはり集中においては、「戀」の表記が名詞・動詞共、際立って多く用いられている。ここにおける第三句と第四句においても、「コフル」も「コヒ」も「戀」という通常文字で統一している。集中においてはこれらの外、「古非」という表記も案外多くみられるが、この表記は、卷十四・十五・十七・十八・十九・二十に限って表れる。

☆玉梓 道不^{アラ}行有者 惻隱^{カカル} 此有戀^{カカル} 不相^{カカル} (十一・2393)

127、道不^{アラ}行有者 此有戀^{カカル}

第二句目と第四句目に、「有」という同じ漢字が用いられている。第二句目の「有」は「アリ」の常訓文字が用いられ集中非常に多くの例をみる。この文字の外、「アリ」は「在」と表記する場合も極めて多くみ

られるが、第四句目の「此有」を意識してか、第二句目の「アラ」は「有」の表記を用いている。一方、第四句目の「カカル」は「此有」と表記され、集中においてはこの外、次の一例のみにもみられるだけである。それは、

梓弓 引不許 有者 此有戀 不相 (十一・2505)

この歌の第三句に「有者」と第四句に「此有」の表記がみられ、「有」の文字の統一性を感じるが、この(十一・2505)番に「此有」の表記がみられ、集中ではこの二例のみである。この外、「カカル」は「如是」の表記が(四・559)・(四・620)番歌にみられ、巻四のみに二例あるのみである。

このように検討してみると、巻十一の二例には「カカル」は「此有」と表記し、巻四では「如是」と表記されている。巻十一の二例については先程も記したが、「有」という文字の統一性を考えての表記であろうと思われる。

☆伯錦 紐解開 タ谷 不知有命 戀有 (十一・2406)

128、不知有命 戀有

第四句目と第五句目に、同じ文字「有」の表記がみられる。第四句目は「シラザライノチ」を「不知有命」と表記している。「ザル」の表記

はこの外、「不」一字の表記が集中に見当たるが、この場合、第五句目の「有」の文字を意識して、「不有」の表記を用いたのであろう。第五句目の「アラ」は「有」という常訓文字が用いられているが、「アラ」は集中にこの外、「在」と表記する場合も極めて多くみられるが、第四句目と第五句目を「有」という同じ文字で統一しようと考えて記載したのであろう。

☆戀事 意追不得 出行者 山川 不知来 (十一・2414)

129、意追不得 不知来

第二句目と第五句目に、同じ漢字「不」が見当たる。第二句目は「カネ」を「不得」と二字で表記している。集中、「カネ」はこの外、「金」の表記が「不得」よりも多くみられ、次いで「不勝」・「兼」などの表記があるが、第五句目の「不」を意識して「不得」の文字を敢えて用いたのであろうか。第五句目の語頭に「不」という否定の助動詞があるが、集中「ズ」の表記はこの外、「受」や「須」など極めて多くみられるが、第二句目の「不得」の「不」を意識して、第五句目も「ズ」の表記を「不」の文字を用いて書いたものと思われる。

☆處女等乎 袖振山 水垣乃 久時由 念来吾等者 (十一・2415)

130、處女等乎 念来吾等者

第一句目と第五句目に、同じ漢字「等」が用いられている。第一句目、「ヲトメラ」の「ラ」は「等」と表記されているが、集中、この外、「憾婦良」のように「ラ」は「良」の文字を用いている場合も、卷十九の(四一六六)・(四一九二)番の二例のみに用いられている。しかし、通例の「等」の表記を用いる方が自然のように思われる。第五句目の「吾等」は新訓「アレ」と附訓されているが、旧訓は「ワレ」であった。これは恐らく単独的な意と解しての訓みであろうと思われる。

さて、「吾等」の表記であるが、集中では、「吾」一字で表記する場合が圧倒的多数を占め、次いで「我」の一字で表記する場合が極めて多くみられる。したがって、通常文字としては「吾」または「我」で、これを用いるべきであるが、この場合「吾」に「等」を添えて、「吾等」二字で「アレ」と訓ませているのは、第一句目の「處女等」の「等」を意識してのことではないかと思う。

☆白檀 石邊山 常石有 命哉 戀乍居 (十一・244)

131、石邊山 常石有

第二句目と第三句目に、「石」という同じ文字がみられる。第二句目の「石邊山」は集中このみの孤例で、「イソヘ」は近江の地名とする説と磯のあたりとする説がある。現代の表記だと「磯邊山」と記載するところであろうが、この歌中では「石邊山」と表記し、第三句の「常石」と「石」と統一性をもたせている。「トキハ」を「常石」と表記してい

るのはこの一例のみで、この外は、「常磐」・「時齒」・「床磐」の表記がみられる。ここに「トキハ」は「常石」とわざわざ「石」の文字を用いたのは、第二句目の「石邊山」の「石」を意識して、第三句目も「石」の文字を用いようと考え「常石」と記載したと思われる。当時の記載意識が推察出来る。

☆事霊 八十衢 夕占問 占正謂 妹相依 (十一・2506)

132、夕占問 占正謂

第三句目と第四句目に、同じ漢字「占」が用いられている。第三句目は「ユフケ」を「夕占」と表記されている。「夕占」の「占」を「ケ」と訓むのは、「八卦」の「卦」を「占」に当てたものであるうか。もともと、「夕占」は「ユフウラ」といつていたのかもしれない。集中、「ユフウラ」という言葉を探してみると、

.....玉梓之 道尔出立 夕ト乎 吾問之可婆 夕ト之 吾尔
告良久 吾妹兒哉 汝待君者 (十三・3318)

「夕ト」という文字ではあるが、「ユフウラ」という言葉があることがわかる。したがって、「夕占」もそのまま「ユフウラ」と訓んでいたのかもしれない。また、集中、「夕ト」を「ユウケ」と訓む例もある。

○タトル毛 占^{ウラ}尔毛告有 今夜谷 不^レ来君乎 何時将^レ待^レ (十一・2613)

○不^レ相^レ尔 夕^{ユフケ}ト平問常 幣^ヒ尔置^レ尔 吾衣^ユ手者 又曾^ユ可^レ續^レ (十一・2625)

卷十一のみに二例見当たる。「占」を「ウラ」と訓む例は、第四句目にみられる外、今みてきた(十一・2613)と、(二・109)にみられるが、「夕占」を「ユフウラ」と訓む例はみられない。しかし、以上のことを勘案すると、案外、「夕占」は「ユフウラ」と訓んでいた可能性も考えられる。

さて、第四句目の「ウラ」は「占」という文字が用いられているが、集中、次のような表記もみられる。

……足千根乃 母之御事歟 百不足 八十乃衢^{ユフケ}尔 夕占^{ユウケン}尔毛
トル毛曾問 應^{オウ}死吾之故 (十六・3811)

と「ト^{ウラ}」という文字がみられる。要するに、集中、「ウラ」の表記は「占」と「ト」と仮名書「宇良」(十四・374)の三種類の表記があるのみである。今、仮名書例は別として考えると、「ウラ」の表記は「占」と「ト」である。これは「ト占」という語がもつ意味から、「ト」と「占」の二字に分離し訓^くよみとして用いたものであろう。結局、「夕占^{ユウケン}」は「夕ト^{ユウト}」と表記しても何ら差支えがなし、「占^{ウラ}」は「ト^{ウラ}」と表記しても何ら差支えがないが、ここでは「占」という文字を両者用い統一しようと

した記載意識が窺われる。

☆雷神 小動 雖^レ不^レ零 吾将^{トドマラ}留^レ 妹留^{トドメ}者 (十一・2514)

133、吾将^{トドマラ}留^{トドメ} 妹留^{トドメ}者

第四句目と第五句目に、同じ漢字「留」が用いられている。一方は「留」を「トドマラ」と自動詞で訓み、一方は「留」を「トドメ」と他動詞で訓み、自動詞、他動詞の二様の扱いをしている。

第四・五句の「留」について『萬葉集注釋―澤瀉久孝著』に、

舊訓ワレハトマラムイモシトドメバとあるを、考にイモトドメナバ、折口氏口釋にイモシトメテバとし、總釋トメテバを取り「トマルに對してはトムでよい。その方が上下調子が合ふ」とある。しかし、前の作の結句をキミヲトドメムとすれば、こちらの結句もイモシトドメバと訓む方がよく、さうすれば第四句をワハトドマラムとよんだ方がよくはないか。「留^{トドマレ}有^レ吾^ハ者^{ヌサヒキ}幣^ヒ引^ヒ」(八・453)ともあるからである。これは佐竹昭廣君(白珠 昭和十二年二月)の説であるが、従ふべきだと思ふ。(二四一頁)

とあり、新訓この御説に従うものが多くある。

勿論、本論稿のテキスト、すなわち、『萬葉集』(塙書房)においても然りである。

さて、「トトマラ」は「留」と表記するのみであるが、「トドメ」は「留」の外、「停」(三・471)や「駐」(十二・3097)などの代わりの文字が

あるが、第四句目の「留」と統一し、第五句目も「留」を用いたと考える。記載意識を知ることが出来る表記をしている。

☆吾妹子之 吾呼送跡 白細布乃 袂漬左右ニ 哭四所念(十一・2518)

134、吾妹子之 吾呼送跡

第一句目と第二句目に、同じ漢字「吾」が用いられている。一方は、「吾」を「ワギ」と訓み、一方は、「吾」を「ワレ」と訓んでいる。「吾妹」を「ワギモコ」と訓むのは「ワガイモコ」の約で、「吾」が「妹」に接続する場合は、「吾」を「ワガ」と訓む。集中、「ワギモコ」は「我妹子」の表記もみられる。

第二句目の「吾」は「吾」に同じであるが、七音句に位置するところであるため、「吾」は「ワレ」と訓む。集中、「ワレ」は「吾」の漢字が圧倒的多数を占めている。次いで「我」・「余」など見当たるが、この場合は、第一句目と、第二句目の語頭に同じ漢字「吾」で統一しようとした記載意識の表れである。

☆家人者 路毛四美三荷 雖往來 吾待妹之 使不來鴨(十一・2529)

135、雖往來 使不來鴨

第三句目と第五句目に、同じ漢字「来」がみられる。第三句目は「往來」と熟語で表記されているが、「カヨヘ」を「往來」と表記してい

る場合はこのみである。この外は、「通」の常訓文字を用いて表記されている場合が大半であるが、第五句目に「来」の文字を用い統一性を意識して「往來」と記載したものであろう。「コ」を「来」と記した例は集中、圧倒的多数を占め、次いで「許」が多く、その外、「故」や「己」の表記がみられるが、常訓文字「来」を用いて、第三句と統一しようとした記載意識の表れであろう。

☆對面者 面隠流 物柄尔 繼而見卷能 欲公轟(十一・2534)

136、對面者 面隠流

第一句目と第二句目に、同じ漢字「面」を用いている。「アヒミテ」を「對面」という漢字で表記しているものは集中、この一例のみで外には見当たらない。したがって、ここは、むしろ附訓態度に問題があるのではなからうか。集中、「面」を「オモ」と訓む例は、「暮相而 朝面無美」(一・60)・「終八子等 面忘南」(十一・251)・「著者也君之 面忘而有」(十一・252)・「面知君之 不所見比日」(十二・305)などがあるが、「面」を「ミル」とか「ミテ」とか「ミル」などの類の訓みは、ここ以外には見当たらない。したがって、この「對面」も案外、もともとは「アヒオモ」と訓んでいたのを、後に「アヒミテ」と意訓に改訓したのではないか。

第二句目の「面隠流」は「面」に「隠す」が結びつき複合語を構成したものである。「面」を「オモ」と訓むことは、漢字本義に添う訓みを

している。集中、「オモ」の表記は仮名書き例以外はすべて「面」という常訓文字を用い表記している。万葉の記載者は第一句目と第二句目に「面」という漢字を用い統一性をもたせ記載意識のもとに書いたものと思われる。

☆希^{メヅラシキ}将^シ見^ミ 君^ミ乎^ミ見^ミ常^ミ衣^ミ 左^ミ手^ミ之^ミ 執^ミ弓^ミ方^ミ之^ミ 眉^ミ根^ミ搔^ミ礼^ミ (十一・2575)

137、希^{メヅラシキ}将^シ見^ミ 君^ミ乎^ミ見^ミ常^ミ衣^ミ

第一句目と第二句目に、同じ漢字「見」が用いられている。

第一句目に「メヅラシキ」を「希将見」と表記しているが、この例は次の歌にもある。

希^{メヅラシキ}将^シ見^ミ 人^ミ尔^ミ令^ミ見^ミ跡^ミ 黄^ミ葉^ミ乎^ミ 手^ミ折^ミ曾^ミ我^ミ来^ミ師^ミ 雨^ミ零^ミ久^ミ仁^ミ (八・1582)

このように「希に見るものは珍しい」というところから、「メヅラシキ」を「希将見」と表記している。この外、集中において「メヅラシキ」の表記は、「目類四寸」・「目類次吉」・「目類布」・「目類敷」・「希見」などがあるが、第二句目の「見」と揃えるために、「希将見」と表記したように思える。第二句目の「見」は常訓文字で集中、圧倒的多数を占めている。

☆不^{オモハ}相^ミ思^ミ 公^ミ者^ミ在^ミ良^ミ思^ミ 黒^ミ玉^ミ 夢^ミ不^ミ見^ミ 受^ミ早^ミ宿^ミ跡^ミ (十一・2589)

138、不^{オモハ}相^ミ思^ミ 公^ミ者^ミ在^ミ良^ミ思^ミ

第一句目と第二句目に、同じ漢字「思」が用いられている。集中、「オモハ」は「思」の文字の外、「念」の表記が最も多く、次に「思」・次に「想」の表記がみられるが、この場合も第二句目の「良思」の「思」と同じ文字で統一しようとしたものか。「ラシ」の表記は、集中、最も多い表記は「良之」で、次いで「良思」、その次には「良志」などがある。「思」を「シ」と訓むのは音訓みであるが、やはり、第一句目の「思」の文字と第二句目の「ラシ」の「思」とは統一しようと考え、「良之」を使わずに「良思」の表記をしたものと思われる。ここも記載意識が窺われる。

☆白^ミ細^ミ之^ミ 袖^ミ者^ミ間^ミ結^ミ奴^ミ 我^ミ妹^ミ子^ミ我^ミ 家^ミ當^ミ乎^ミ 不^ミ止^ミ振^ミ四^ミ二^ミ (十一・2609)

139、我^ミ妹^ミ子^ミ我^ミ

第三句目の語頭と句末に「我」という同じ文字が用いてある。「ワギモ」は「ワ」+「ガ」+「イモ」の約で、「我」が「妹」に接続する場合は「我」は「ワガ」と訓む。集中において「ワギモ」は普通「吾妹」と表記されているが、ここは句末の助詞「我」と同じ文字で統一しようとした記載意識によるものであろう。助詞「ガ」は集中、「我」の文字が圧倒的多数を占める。この外、「ガ」は「之」・「何」・「賀」などみられるが、句の始めと末を「我」で統一する意識からであらう。

☆紅之 深染衣 色深 染西鹿齒蚊 遺不得鶴(十一・2624)

140、深染衣 色深

141、深染衣 染西鹿齒蚊

第二句目と第三句目に、同じ漢字「深」が用いられている。「深染」を「コソメ」と附訓しているが、『萬葉集注釋』や『日本古典文学全集』では、「深染」を「フカソメ」と漢字本義に添う訓みをしている。ここは、色が濃いという意味で「深染」を「コソメ」と訓んでいるが、訓みの揺れがあるところである。集中、「コソメ」は「深染」の表記しかない。一方、三句目の「フカク」は仮名書例がある以外は、すべて「深」のみの表記しかない。

次に一四一番の「染」の表記についてみる。「シミ」を「染」と表記するのは集中、この外、仮名書例が一例あるのみで、「シミ」は「中に深くしみ通って、染まる」という意で、「染」と書く外は見当たらない。

結局、この(十一・2624)番歌には、「深」という漢字が二個と、「染」という漢字が二個使われ、それぞれ異なる訓みをしているが、それぞれ代わりの文字がないので、自然にこの漢字を用いて記載したものであろう。

☆暮月夜 暁闇夜乃 朝影尔 吾身者成奴 汝乎念金手(十一・2664)

142、暮月夜 暁闇夜乃

第一句目と第二句目に、「夜」という同じ文字が用いられている。第一句目の「ユフツクヨ」は「暮月夜」と表記されているが、集中にはこの表記が五例あり一番多い。この外「夕月夜」の表記が二例見当たるのみである。

第二句目の「ヤミ」を「闇夜」と表記しているが、集中にはこの外、「闇」と表記しているものが二例見当たる。漢字の本義から考えると「ヤミ」は「闇」一字で表記するのが普通のように思えるが、第一句目に「夜」という文字があるため、第二句目も「闇」に「夜」の文字を添えて「闇夜」と表記した感がする。記載者の統一性を意識した表れであろう。

☆味鎌之 塩津乎射而 水手船之 名者謂手師乎 不相将有八方(十一・2747)

143、水手船之 名者謂手師乎

第三句目と第四句目に、同じ漢字「手」が用いられている。第三句目の「コグ」を「水手」と表記しているが、これは集中においてもう一箇所、(七・1143)にある。「コグ」は普通「撈」が多く使われ、次には「傍」の表記がみられる。ここは敢えて「水手」と表記したのは、第四句目の「手師」を意識して表記したのか。「手師」は助動詞で、その表記は「而師」・「而為」・「而右」などいろいろあるが、第三句目の「手」を意

識して揃えるために第四句目の「テシ」も「手師」と表記したものであろう。

☆梓弓^{アツサユミ} 弓束卷易^{ユツカ} 中見刺 更雖^レ引 君之隨意（十一・2830）

144、梓弓^{アツサユミ} 弓束卷易^{ユツカ}

第一句目と第二句目に、同じ漢字「弓」が用いられている。第一句目の「アツサユミ」は「梓弓」と表記するのが常訓文字で集中すべてこの表記が用いられているが、一個所のみ「梓弧」（十九・4214）と底本にあったのを「梓弓」の誤りと考えて意改し表記されている。第二句目の「ユツカ」は「弓束」と表記され、集中にはこの外、（七・1330）に同じく「弓束」と表記された例がみられるが、この二例以外は仮名書例を除いて例をみない。したがって、「梓弓」も「弓束」も常訓文字を用い自然に表記したものであろう。

以上、巻十の後半部分と、巻十一の四百九十首の中から一首中の同じ漢字が異なる訓みをしているものを選出して検討したが、記載者の記載意識によって、一首の歌を漢字で表記する場合、いろいろ工夫されていることがわかる。

（続）

※本稿を成すにあたり、平成十三年度大阪樟蔭女子大学特別研究助成金の一部をあてた。